

聖書に学ぶ

—— 旧約と新約をつなぐもの：信仰と約束の継承 ——

阿 部 包

はじめに

こんにちは。ただいまご紹介いただきました藤女子大学キリスト教文化研究所所長の阿部包と申します。石狩市花川にある人間生活学部の特任教授としてキリスト教科目を担当しております。本日は何かとお忙しい中、ご来場くださいます、まことにありがとうございます。はじめに簡単な自己紹介を申し上げます。

わたしは、この春 65 歳になって、通常の常勤職を退き、引き続き特任教授として務めております。生まれも育ちも札幌圏の道産子です。カトリックの洗礼を受けて 61 年になります。教育大学岩見沢分校を経て北海道大学大学院文学研究科で哲学・宗教学を専攻しました。大学院に進んだときはディオニュシオス偽書を研究する積りでしたが、準備作業として始めたパウロ研究をそのまま続けることになって今日に至っております。人生は分からないものです。

北海道を離れたのは最長で一ヶ月余り、行き先はイスラエルでした。専門が新約聖書なので、海外へ行くとと言っても、イスラエル、ヨルダン、シリア、トルコ、ギリシアが中心で、その他はイタリア、フランス、スペインです。アメリカ大陸は北も南も行ったことがありませんし、これからは行かないでしょう。ユダヤ教との関係でポグロムとかホロコースト(ショアー)には強い関心を持ち続けて参りましたので、United States Holocaust Memorial Museum, Washington DC. には行きたいですし、美術が好きなので Metropolitan Museum of Art, N.Y. にも行きたいのですが、アメリカにはどうも行きたくありません。

個人的なことをお話ししますと、一昨年秋に天国へ旅立った妻と現在別居結婚をしております。妻を送り出した後セルフ・グリーフケアの日々の中で、わたしは男が未亡人と呼ばれないことを不思議に感じるようになりました。皆さんは不思議に思われませんか。今わたしが妻のことに触れたのは、きょうお話しする内容が、妻と共に歩んだ12年半の中から生まれたものだからです。わたしの信仰理解も、彼女との日常生活と対話なしには生まれませんでした。

ここで、わたしが大学の教員という本職の傍ら今取り組んでいることに触れておきます。それは日本聖書協会が現在進めている新翻訳事業の原語担当者・翻訳者委員会委員・編集委員会委員としての仕事です。わたしは新約聖書と旧約聖書統編の翻訳作業に関わっています。2011年からのので、かれこれ6年になります。現在最もよく使われている『聖書新共同訳』は1987年に初版が発行されました。新翻訳事業は、それに代わる現代の聖書を！という計画のもとに進められています。2018年度中には発行に漕ぎ着けたいというのが、総主事の強い望みです。遅くとも、印刷に回すところまでは行けるのではないかと期待しております。

さて、きょうの講演内容は大きく分けて2つあります。1つ目が信仰。2つ目が約束の継承です。信仰はギリシア語でピスティス。約束の継承は説明的に表現したもので、ギリシア語でクレーロノミアーです。かつて「嗣業」と訳されていた用語です。訳語としては、「相続財産」、「遺産」の可能性もあります。「受け継ぐべきもの」という説明的な訳語を使わなければ理解しにくい場面もあると思います。本日は、これら2つの用語をキーワードとして、旧約聖書と新約聖書をつなぐ重要なメッセージを読み取り、みなさまと分かち合いたいと思っております。

1. 信仰をめぐる疑問

まず、信仰について、です。先ほど申し上げたとおり、ギリシア語でピスティスという名詞です。来年2017年は、宗教改革500年という記念すべき年に当たりますが、通常、われわれ人間が神から義と認められるのは、信仰によるのであって行為によるのではないと考えられており、それはパウロに由来するキリスト教の教えの根幹をなすものだと言われ

ます。いわゆる「信仰義認」論です。その場合、対概念としての「行為義認」は排除されるのが通例です。「信仰のみ」*sola fide*ですね。

わたしは4歳の時にカトリック円山教会で、フランシスコ会のアウグスティノ・ティッシュリングル神父様から洗礼を受けました。この神父様はドイツ人ですが、育った地域もあってサボー（木靴）を履いておられたのを今でも覚えています。お話しになる日本語は7割くらい分かりませんでした。真っ赤な顔で汗を流しながらなさるお説教や子どもたちとの熱心なやり取りは、宣教において重要なものは何か？を考える上で示唆的です。

わたしは長年カトリック的な環境の中で生活して参りましたので、次のような素朴な疑問を捨て切れずに来ました。神さまは行為によって義と認めてくださらないとすれば、義と認めてくださる信仰とは一体どのようなものなのだろうか？ 行為と無縁な信仰はそもそも存在しうるのだろうか？ パウロは本当にそのような奇妙なことを福音の真髄として宣教したのだろうか？ わたしが大学院でパウロを読み始めたときも、こうした極めて素朴な疑問は解けていませんでしたし、その後も長い間解けずにきました。

ついでに申し上げますと、「何十年も信者として生きて来たのに、こんなことを訊いたら、恥ずかしい」と感じたら、お仕舞いです。その時点で、進歩も成長も自ら放棄したことになります。疑問は素朴な方が根源的な場合が少なくありません。例えば、小さな子どもが親など大人にぶつけてくる疑問・質問を考えてみるだけで十分でしょう。大人は成長過程で、そのような根源的・本質的な問いを発すること自体を放棄してしまった人間と定義することができるかもしれません。誰もが訊きたくて仕方がないけれど、立場がなくなったら困るので訊かずにいるということがあるものです。予想以上に早く妻と引き裂かれて生活してみても一つだけ良かったことがあります。それは、立場がなくなっても、人間としては全然困らないという事実気づいたことです。

2. 問題なのは律法に基づく行為

さて、それでは、信仰についてパウロはどのように書いているでしょ

うか。ローマの信徒への手紙3章22節の有名な個所です。まず新共同訳で読んでみましょう。「信仰による義」という小見出しがついていますが、直前の件には「正しい者は一人もいない」という小見出しがついています。ここでは、1章18節から続く内容を詩編14編1～3節（＝53編2～4節）などを論拠として「ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にある」という言葉で要約しています。また、われわれの箇所少し前、3章20節には「なぜなら、律法を實行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。」とも書かれています。

新共同訳で「律法の實行によっては」と訳されているのは、エクス・エルゴーン・ノムーという句です。エルゴーンはエルゴンの複数属格形です。ここでエルゴンは「実行」と訳されていますが、「行い、業」とも訳し得る用語で、当然「行為義認」の行為をも指します。忘れないでいただきたいのは、この文脈でパウロが考えているのは決して行為一般ではなく、律法に基づく限りにおける行い、業、行為だということです。われわれが端的に行為義認と言うと、律法とは離れて行為一般を指す可能性が開けてしまうのではないのでしょうか。その可能性の方へわれわれが踏み出すと、実は、踏み出した分パウロから離れてしまうことになります。

もしかすると、パウロはその危険性を既に感じていて、「律法の行いによっては」を「律法によっては」と言い換え、「だれ一人神の前で義とされない」を「罪の自覚しか生じない」と言い換えたのではないか、とわたしは想像を逞しくするわけです。パウロが強調したいのは、行為一般ではなく、厭くまでも律法であり律法に依拠する行為なのです。

3. イエス・キリストのピスティスの意味

次に、いよいよ、われわれの箇所に入りましょう。同じく新共同訳です。

「²¹ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。²²すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。」 注目してい

ただきたいのは、22 節の「イエス・キリストを信じることにより」と訳されている箇所です。原文ではディア・ピステオース・イエスー・クリストゥーという前置詞句です。敢えてピステオースはそのままで直訳すると「イエス・キリストのピスティスをとおして」です。ちなみに、通常このディアという前置詞は「によって」と訳されます。それでも悪くはないのですが、より厳密には「をとおして、を介して」と訳したいところです。英語の through, ドイツ語の durch に対応します。この前置詞句は、20 節後半の「律法をとおして」ディア・ノムーを意識した構造になっています。律法とイエス・キリストのピスティスが対置されているという点が重要です。

つまり、パウロは、律法によっては罪の自覚しか生じない状況のただ中に、その律法とは関係なく、神の義が現されたのだと告げ、この神の義はイエス・キリストのピスティスをとおしてもたらされ、信じる者すべてに及ぶと説明しているわけです。

この文脈にわれわれの信仰が入り込む余地はありません。この点は非常に重要なので、思い切って言いましょう。わたしはわたし自身の信仰によって義とされることは決してありません。わたしの信仰は、イエスのピスティスをとおして義とされたわたしの応答以外の何ものでもありません。比喩的に言いましょう。わたしが応答しないなら、義とされたという救いの事態がわたしの指の間からこぼれ落ちて行くだけです。

イエス・キリストのピスティスをどう訳すかはともかく、「イエス・キリストを信じること」と訳す可能性は限りなくゼロに近いと思います。この点は、20 世紀後半から 21 世紀初めにかけての新約学の到達点の一つと評価してよいと思います。

たった今、わたしは「イエス・キリストのピスティスをどう訳すかはともかく」と言いました。わたし個人としては「イエス・キリストの信仰」と訳したいのですが、目下進められている新翻訳事業の新約部門の訳語検討会では、訳語として「イエス・キリストの信仰」には根強い反対があり、現在のところ、「イエス・キリストの信実」に落ち着く予定です。こう訳す場合、この句の意味は「イエス・キリストにおいて神が示された信実」だと主張されます。わたしなら、「ピスティス・テウ・エン・クリストー・イエスー」（直訳「キリスト・イエスにおける神の信

実)」と表現するでしょう。パウロは前後の文体を重視して不自然なほど省略する人ではありますが、この程度の句を使うことができないとは思えません。

ミサや礼拝式・聖餐式での朗読の場面を想像してみてください。「しんじつ」と聞こえたとき、「信仰」の「信」と「現実」の「実」を組み合わせた「信実」という二文字熟語を即座に思い浮かべる人がどれだけいるのでしょうか。ほとんどいないのではないかと甚だ心配ですが、個人訳ではないので仕方ありません。補足的なことを言えば、現代日本の新約聖書研究をリードする研究者の大部分はプロテスタントの信徒で、彼らが「イエス・キリストの信仰」という訳語には猛反対しているので、どうすることもできない状況にあります。

このようなプロテスタント側の根強い抵抗感の背景には、イエスは飽くまでも信仰の対象であって、神への信仰の主体であってはならない、という言わばプロテスタント陣営の暗黙の了解があるようにわたしには感じられます。しかし、キリスト教のイエス理解をそのままパウロのイエス理解に持ち込むことは避けなければならないのではないかと思います。わたしがいつも思い起こすのは、福音書に描かれたゲッセマネの園で父なる神に向かって祈るイエスの姿です。当然のことですが、イエスは神に親しく「アッパ（父さん）」と呼びかけて祈る信仰熱心なユダヤ人でした。彼ほど父なる神に全幅の信頼をおいて生涯を歩んだ人（信仰の人）はいないでしょう。

敢えて言えば、パウロはキリスト教神学の豊かな源泉ではありますが、決して完成者ではありません。彼は 20 世紀 21 世紀のわれわれと同じキリスト者ではありません。ちなみに、キリスト者という用語はパウロまで遡りません。もちろん、キリスト者という言葉のニュアンスには、ガラテヤの信徒への手紙 2 章 20 節の「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」が大いに影響を与えているとは思いますが、しかし、キリスト者(クリスチアノイ)という新語を造り出したのは彼ではありませんでした。よく知られるとおり、使徒言行録 11 章 26 節に「このアンティオキアで、弟子たちが始めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。」とあります。

さて、わたしは大方のプロテスタントの研究者の批判を浴びるのは百

も承知で、きょうの講演は、ピステイス・イエスー・クリストゥー（イエス・キリストのピステイス）という句に「イエス・キリストの信仰」という訳語を当てて進めて参ります。

4. イエス・キリストの信仰

それでは、パウロが「イエス・キリストの信仰」と呼ぶ事柄の内容は、具体的にどのようなものでしょうか。それを解く鍵は、先ほどの箇所直後にパウロ自身が敷衍的に言い換えてくれています。ローマ3章23節以下の件です。読んでみましょう。ここは2箇所を除いて新共同訳で大丈夫です。

「²³人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、²⁴ただキリスト・イエスによる贖いの業をとおして、神の恵みにより無償で義とされるのです。²⁵神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。²⁶このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。」

「除いて」と言った2箇所、つまり大丈夫ではない箇所を先に指摘しましょう。25節です。「²⁵神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいした」と訳されています。「神はこのキリストを立て」の後を原文に忠実に訳してみましょう。「その血における信仰をとおして、宥めの供え物となさいました。」「信じる者のために」とは書かれておらず、この句は、何らかの先入見に影響された誤訳ではないかと思います。なお、「その血における信仰」をわたしは、「その血をもって示した信仰」とも訳し得ると考えています。

パウロの頭の中では、「イエス・キリストの信仰」は「イエス・キリストにおける贖い」、また「彼の血における信仰」と言い換えることが可能だったということです。ちなみに、24節の「キリスト・イエスによる贖いの業」も直訳すれば、「キリスト・イエスにおける贖い」であって「の業」は余計な挿入です。

2つ目の箇所は、文末に「イエスを信じる者を義となさるため」とあ

りますが、その中の「イエスを信じる者」と訳されてきた句です。これは、トン・エク・ピステオース・イエスーという句ですが、直訳すると「イエスのピステイスからの者」となります。「からの者」では分からないので、意味を考えて少し分かりやすく言い直すと「イエスの信仰に基づく者、イエスの信仰に依拠する者」、つまり「イエスの信仰を拠り所とする者」です。ここで、パウロは恐らく対立句としてトン・エク・ノムー、「律法を拠り所とする者」を思い浮かべていたに違いないとわたしは想像します。もう一度思い出していただきたいのですが、パウロが対立したものと考えたのは、行為一般と信仰一般ではなく、律法の行い・業・行為とイエス・キリストの信仰でした。

この対比は、パウロの召命体験の前の生と後の生との対比に重なります。ファリサイ人パウロは、律法を拠り所とし律法の行い・業・行為によって義とされると確信していました。召命体験は、神ご自身がその確信を覆した出来事でした。ファリサイ人にとって、「木にかけられた死体」つまり十字架にかけられて処刑されたイエスは、「神に呪われたもの」(申命記 21 章 23 節)に他なりませんでしたが、召命体験は、律法が「神に呪われたもの」としたイエスを神御自身がメシアとして彼に示した出来事だったのです。

5. 信仰は行為と対立しない

このように、パウロが対立したものと考えたのは律法の行い・業・行為とイエス・キリストの信仰であって、決して人間の行為一般と信仰一般ではなかったのです。

それをご理解いただいた上で、信仰との関りでこの理解を補強してくれるのではないかとわたしが考える 2 つの箇所をご紹介したいと思います。新共同訳の次に私訳を示します。

1 つはガラテヤ 5 章 6 節です。読んでみましょう。

「キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です。」(新共同訳)

「キリスト・イエスにあれば、割礼も無割礼も何ら重要ではなく、愛を

とおして現実のものとなる信仰こそ重要なのです。」(私訳)

簡単に解説を加えましょう。「割礼も無割礼も」は当然、ユダヤ人も異邦人もという意味です。単純化して言えば、キリスト・イエスの内にありさえすれば、どんな人でも愛の行い・業・行為をとおして信仰を実現すればそれでよい。もう少し説明的に言えば、キリスト・イエスの内に留まっていれば、この世的な出自はそれ自体では何の力もない。力を発揮するのは、具体的な愛の行い・業・行為によって現実のものとなる信仰なのだ、ということでしょう。

先に「現実のものとなる」と訳したのは、エネルギーメネーという分詞です。元はと言えば、動詞エネルギーが変化した形です。そして、ここでわたしは少しばかり想像力の翼を羽ばたかせたくなのです。つまり、わたしはこの単語の背後にエン・エルギーという前置詞句を見ます。これは直訳すると「業のうちに、業をもって、業によって」です。「業」は「行い、行為」とも訳し得ることは、既に触れたとおりです。日本語の表現らしく、「信仰は、愛の業、愛の行為として具体化されない限り、絵に描いた餅に過ぎない」と言った方がよいかもしれません。

これと関連して、ご紹介したいのが次の非常に有名な箇所です。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」(ヨハネ 15 章 12～13 節)。直接関連するのは 13 節ですが、恐らく、誰もがそこにイエスの十字架上の死を予見するでしょう。

この言葉がイエスご自身に遡るかどうかを問う必要はありません。少なくともヨハネ福音書記者はこの言葉をイエスにふさわしいと信じた。

「イエス・キリストの信仰」という訳し方との関係で、さらに参照しておきたい箇所は、ゲッセマネの園におけるイエスの祈りの場面(マタイ 26 章 36～46 節、マルコ 14 章 32～42 節、ルカ 22 章 39～46 節)です。少なくともここでのイエスは、父なる神への信仰厚いユダヤ人以外の何者でもありません。非常に印象深いのは、彼が父なる神に向かって苦しみ

を取り除いてくださるようにならねばならぬ、それにも拘わらず、すべてを父のご遺志に委ねた姿です。それは丁度、受胎告知の際にマリアが示した姿と見事に重なります。

なぜわたしが「イエス・キリストの信仰」と訳すのか。最後に参照したいのは、パウロ自身がそれを論証するために引き合いに出したアブラハムの信仰を伝えるエピソードです。パウロが引用したのは、創世記 15 章 6 節の有名な件です。新共同訳では「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」となっています。パウロはそれを引用して、ローマ 4 章 3 節で「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」と記しました。ここで「それ」が指示している内容は、明らかに「アブラハムは神を信じた」です。「アブラハムの信仰」と言い換えても意味は変わりません。だからこそ、パウロは「イエス・キリストの信仰」を論証し得るものとして創世記 15 章 6 節を引用したのです。

ちなみに、先に引用した創世記 15 章 6 節後半部の主語をどう解するかについては大きな問題があります。伝統的な解釈は、新共同訳を支持しますが、創世記 12 章～22 章のアブラハム物語全体の展開から見れば、前半部の主語アブラムがそのまま後半部の主語でもあると解するのがよい筈です。月本昭男先生がそう解釈しておられます。岩波版（松田伊作・並木浩一・池田裕・鈴木佳秀・月本招男・関根清三 [責任編集]『旧約聖書 I 創世記』岩波書店、1997 年）、当該箇所参照。ちなみに、パウロは引用に当たって、自分が口述筆記している前後関係にしっかり収まるように、「主」を「神」に替え、後半部を能動から受動に替えています。

ここまでの内容を簡単にまとめておきましょう。「イエス・キリストの信仰」は、彼自身がその血をもって示した信仰であり、「贖い」と言い換えることが可能な事態を指しています。端的に言えば、イエスの十字架上の死を指します。パウロはそれを論証するためにアブラハムの信仰を引き合いに出しました。それは、恐らくパウロが両者に同じ構造を見たからではないでしょうか。パウロはローマ書よりも前に書いたガラテヤ書において、信仰を「愛をとおして現実のものとなる」と説明しています。この場合の信仰は決して行い・業・行為を排除するものではありません。

せん。

6. 約束の継承について

それでは、本日の2つ目のキーワード「約束の継承」に話を移しましょう。

旧約聖書ではナハル／ナハラーという用語(ナハルは59回、ナハラーは224回、動詞・名詞合わせて283回使用。口語訳はそのうち240回を「嗣業」と訳し「しぎょう」と読ませています。新共同訳は247回「嗣業」と訳しています)、新約ではクレーロノメオー／クレーロノミアーという用語(クレーロノメオーは18回、クレーロノミアーは14回使用。関連する同語根の単語クレーノモスが15回、クレーロスが11回、クレーロオーが1回使用)です。口語訳以降「嗣業」という訳語が旧約聖書において適用されてきました。ですから、わたしと同年代かそれよりも上の皆さんは、「嗣業」で何となく理解できるかもしれません。しかし、若い世代の人に理解を求めても無理でしょう。わたしが関わってきた日本聖書協会の新翻訳事業でも、訳語を何にするか、二転三転しています。文脈によって訳し分けられる可能性が大きいと思いますが、先ほど挙げたナハル／ナハラー、クレーロノメオー／クレーロノミアーという用語は、「受け継ぐ、受け継ぐべきもの」を意味の基本とするのがよいとわたしは考えています。名詞としては、「相続財産、遺産」などの可能性が残ります。

本日の前半でもアブラハム物語のエピソードが出て参りましたが、後半のキーワードに関してもアブラハムが重要な役割を演じています。アブラハムについて、パウロは「その信仰が義と認められた」とユダヤの伝統に従って理解したわけですが、ご承知のとおり、アブラハムとの関係でもう一つ重要なのは「約束」が与えられたという点です。その約束は、アブラムが「生まれ故郷」、「父の家」を離れて、主が示す地に行くなら、彼を大いなる国民にし、祝福する、というものでした。それだけではなく、地上に住む者はすべてアブラムによって祝福に入る、と告げられます。神の祝福はアブラムをとおしてのみ得られるというのですが、それだけではありません。「地上に住む者はすべて」ですから、神の祝福

の対象は子孫とは限らないということです。神の祝福は、血に基づく子孫を越えて信仰に基づく子孫を対象とすることになります。

アブラハムとその一族が主の命令に従ってカナンの地に入ったとき、主は彼に向かって「あなたの子孫にこの土地を与える」と宣言します(創世記12章1～7節、参照)。ちなみに、ここでは「あなたの子孫に」と告げられており、「あなたの信仰の子孫に」とは告げられていません。このように、神の言葉はしばしば正確ではありません。

その後、主の約束の言葉は拡大します。「見える限りの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数え切れないように、あなたの子孫も数え切れないであろう。」(同13章15～16節)。約束の土地の起源です。この約束の土地は、アブラハムの信仰を受け継ぐ者たちが受け継ぐことを約束された土地、かつての訳語を使えば「嗣業の地」です。敢えて余談をすると、わたしが気になるのは、最初の土地取得が、亡き妻サラのためにアブラハムが銀400シェケルで購入した墓所、マクペラの洞穴とその周りの畑地だという点です。

しかし、重要なのは、アブラハムの子孫すべてが受け継ぐわけではないことでしょう。イサク以降の歴史的物語を読むと、それは明らかです。アブラハムの子孫の中には、信仰を捨てた者も少なからずいました。士師記には「彼らは神の目に悪とされることを行い」という紋切り型の表現が、繰り返して出て参ります。「神の目に悪とされること」は、具体的に言えば、バアル神やアシュトレト神を神として崇めることです。バアル神は男神、アシュトレト神は女神です。いずれもイスラエルの民にとっては、先住民が信奉する豊穡多産の神々です。バアル神については、有名な預言者エリヤのエピソードに出ます(列王記上18章、参照)。なお、アシュトレトは、地域によってはアシュタルテ、イシュタルとも呼ばれていました。また、バアルの意味は「主」ですから、イスラエルの民が自分たちの神を固有名詞で呼ぶことを避けて呼んだアドナイ(わが主)と同じ意味です。

士師記に描かれた時代のイスラエルの民がしばしば陥ったこの逸脱は、遊牧生活から農耕生活に移行する段階で経験せざるを得ない必然的な試練だったでしょう。聖書記者は、自分たちイスラエルの民の経験の意味

を、常に神との関係のうちに読み取ろうとします。

既に触れたとおり、このナハル／ナハラーを口語訳は一部を除き「嗣業」と訳し、新共同訳もそれを継承しました。ただ、この「嗣業」という訳語は、残念ながら一般社会に受け入れられませんでした。それは恐らく、それらに対応するクレーロノメオー／クレーロノミアーが、口語訳ではほぼ「財産」と訳され、新共同訳ではそれぞれの文脈に合わせて訳し分けられているからだと思います。この旧約聖書におけるナハル／ナハラーと新約聖書におけるクレーロノメオー／クレーロノミアーとの訳語の相違は、やはり大きな問題であり、できれば少なくとも直ぐ類語だと分かる訳語にすべきだろうと思います。

ここでまず、旧約聖書における用法を以下に概観しておきたいと思います。区分は今回の新翻訳事業における旧約訳語検討会において日本聖書協会翻訳部が作成し配布した資料(2015年3月20日)に基づいています。それぞれの訳語は、「：」の前が新共同訳における代表例、後が翻訳部による提案です。

1. 土地を指す場合 (207 回)

「嗣業」、「嗣業の地」、「嗣業の土地」など：「譲りの地」、「相続地」

2. 民を指す場合 (28 回)

「嗣業」：「所有の民」

3. その他 (16 回)

「嗣業」：「相続分」

4. 特殊 (3 回)

「嗣業」：「ご自分の」

今後 30 年を考慮すると、「相続地」はともかく、個人的には「譲りの地」は避けたい訳語です。「受け継ぐべき地」、「受け継ぐべき土地」が分かりやすいでしょう。訳しにくいのは 2. と 4. です。訳語には若干不自然であっても「受け継ぐ」、「相続する」のニュアンスを残したいところです。

例えば、申命記 4 章 20 節にアム・ナハラーという用語が出てきますが、新共同訳では「嗣業の民」と訳されています。これを使わないとす

れば、説明的であっても「所有の民」より「受け継ぐべき民」が望ましいと思います。

また、詩編 33 編 12 節に新共同訳で「主が嗣業として選ばれた民」という句が出てきます。これも「主がご自分のものとして選ばれた民」でよいように思われますが、若干分かりにくくても「主がご自分の受け継ぐべきものとして選ばれた民」がよいように思います。

ナハル／ナハラーという用語の背景には、神がアブラハムとその子孫との間に信仰を条件として排他的に結んだ契約があり、神とイスラエルの民との双方が契約関係の当事者であるという事情があります。つまり、両者にとって受け継ぐべきなのは、この契約関係です。本来、神がこの契約関係を破棄することはありませんので、遵守するか破棄するかは、常に民の側の問題です。民にとっては、常に信仰をもって応答することが何よりも求められます。信仰をもって応答しないことは、契約関係の破棄に他なりません。彼らが信仰をもって応答することを常に忘れずにいるために、神から恵みとして与えられたのが律法であり、そのような契約関係の印が割礼でした。つまり、律法も割礼も信仰あってこそ意味を持つわけです。

ここで、「相続分」という訳語の可能性のある箇所について考えてみましょう。民数記 18 章 24 節を新共同訳は、「わたしはイスラエルの人々が主にささげる献納物の十分の一をレビ人に彼らの嗣業として与えるからである。わたしは彼らに、イスラエルの人々の間では嗣業の土地を持つてはならない、と言ったのである。」と訳しています。ここに二回出て来る「嗣業」がナハラーなのですが、これをどう訳すかが課題とされています。「相続分」のままではしっくりこないからです。しかし、「受け継ぐべきもの」、「受け継ぐべき土地」なら、しっくりくるのではないのでしょうか。

ヨシュア記 18 章 7 節に、「レビ人にとっては、主の祭司であることがその嗣業なのだ」という文章があります。「相続分」でもよいのですが、「受け継ぐべきもの」、「受け継ぐべき財産」、「受け継ぐべき遺産」で構わないでしょう。汎用性、訳語の分散を極力抑えるという視点を重視したいと思っています。

では、ナハル／ナハラーに続いて、クレーロノメオー／クレーロノミアーについて簡単に見ましょう。

まず、クレーロノメオー(マタイ 5：5, 19：29, 25：34, マルコ 10：7, ルカ 10：25, 18：18, 1 コリント 6：9, 10, 15：50(2回), ガラテヤ 4：30, 5：21, ヘブライ 1：4, 14, 6：12, 12：17, 1 ペトロ 3：9, ヨハネ黙示録 21：7。)です。「(地を) 受け継ぐ」, 「(永遠の命を) 受け継ぐ」(4回), 「(国を) 受け継ぐ」(以上, 福音書), 「(神の国を) 受け継ぐ」(4回), 「(朽ちないものを) 受け継ぐ」, 「相続人になる」(以上, パウロ), 「(名を) 受け継ぐ」, 「(救いを) 受け継ぐ」, 「(約束されたものを) 受け継ぐ」, 「(祝福を) 受け継ぐ」(以上, ヘブライ), 「(祝福を) 受け継ぐ」, 「(これらのものを) 受け継ぐ」(ヨハネ黙示録)。

次にクレーロノミアー (マタイ 21：38, マルコ 12：7, ルカ 12：13, 20：14, 使徒言行録 7：5, 20：32, ガラテヤ 3：18, エフェソ 1：14, 18, 5：5, ヘブライ 9：15, 11：8, 1 ペトロ 1：4。)です。「相続財産」(4回, 福音書), 「財産」, 「(恵みを) 受け継がせること」(以上, 使徒言行録), 「相続」(ガラテヤ), 「(御国を) 受け継ぐ」, 「(聖なる者たちの) 受け継ぐもの」, 「(キリストと神との国を) 受け継ぐ」(以上, エフェソ), 「(御国を) 受け継ぐという(報い)」(コロサイ), 「(永遠の財産を) 受け継ぐため」, 「(財産として) 受け継ぐことになる(土地)」(以上, ヘブライ), 「(財産を) 受け継ぐ者として(くださいました)」(1 ペトロ)。

関連して、クレーロノモス(マタイ 21：38, マルコ 12：7, ルカ 20：14, ローマ 4：13, 14, 8：17(2回), ガラテヤ 3：29. 4：1, 7, テトス 3：7, ヘブライ 1：2, 6：17, 11：7, ヤコブ 2：5。)です。「相続人」(3回, 福音書), 「(世界を) 受け継がせること」, 「(世界を) 受け継ぐ」, 「相続人」, 「(神の) 相続人」, 「(約束による) 相続人」, 「相続人」, 「(神によって立てられた) 相続人」(以上, パウロ), 「(永遠の命を) 受け継ぐ者」(テトス), 「(万物の) 相続者」, 「(約束されたものを) 受け継ぐ人々」, 「(信仰に基づく義を) 受け継ぐ者」(以上, ヘブライ), 「(約束された国を) 受け継ぐ者」(ヤコブ)。

なお、ローマ 8章17節には、シュンクレーロノモス「共同相続人」という用語も出てきます。これは「キリストとの共同相続人」, 「キリスト

と共に相続する者」を意味します。

このうち、わたしが特に注目するのは、ガラテヤ3章18節、3章29節です。

「相続が律法に由来するものなら、もはや、それは約束に由来するものではありません。」(3:18)。

「あなたがたは、もしキリストのものだとするなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束の相続人なのです。」(3:29)。

なお、3章18節にでる「……に由来する」は「前置詞エク＋属格」の訳です。直訳すれば「から」です。「に基づく」、「に依拠する」と訳すこともできます。

以上、新共同訳におけるクレーロノメオー／クレーロノミアーおよび関連するクレーロノモスの訳語を確認して分かることは、旧約聖書におけるナハル／ナハラが基本的に約束の土地を受け継ぐことをめぐる概念であったのに対し、新約聖書におけるクレーロノメオー／クレーロノミアーが、約束の土地ではなく、「永遠の命」、「神の国」、「世界」、「約束されたもの」を受け継ぐことを意味するものとして使われるようになっていことでしょう。しかし、そこに具体的なものから抽象的なものへの転換はあるものの、後にキリスト者と呼ばれることになる人々が、自分たちこそイスラエルなのだという誇りをこの用語に込めて使ったことを見ることができるようになります。旧約聖書においてナハル／ナハラで表現されていた人々と自らを重ね合わせて見ていたということでしょう。

しかし、前半でお話ししたとおり、信仰そのものは決して抽象的なものではなく、愛の行い・業・行為という、優れて具体的な姿となって表われなければなりません。イエス御自身が優れて実践家であった点をここで想起しておきたいと思います。

おわりに

きょうは、「信仰と約束の継承」というキーワードを基に、旧約と新約をつなぐものというタイトルでお話しして参りました。最後に簡単にま

とめておきたいと思います。

アブラハムに始まる人々の歴史は、信仰によって約束を受け継いだ人々と信仰を捨てて約束の埒外に自ら脱落して行った人々の歴史として読み直すことができます。その意味で、信仰こそが約束を受け継ぐこと、すなわち約束の継承を確かなものとし、信仰の放棄はそのまま約束の放棄を意味することになるでしょう。

ただし、イスラエルの民、ユダヤ人に当てはまったことはキリスト者にもそのまま当てはまります。旧約聖書に描かれた彼らの多くのエピソードはわたしたちにとっても多くの教訓を与えてくれているに違いありません。キリスト者は「キリストの内にある」者ですが、キリストの外に出る可能性は常に身近にありますし、キリスト者は「キリストを着た」者（ガラテヤ3章27節、参照）ですが、それはキリストを脱ぎ捨てる危険性が常に自分の中にあることを示唆してもいます。

ご清聴、ありがとうございました。

※なお、「はじめに」で触れた日本聖書協会の新しい翻訳聖書は、『聖書聖書協会共同訳』という書名で2018年12月に出版されることになりました。

※『聖書 聖書協会共同訳 特徴と実例 ― 礼拝にふさわしい聖書を―』という23頁ものの小冊子が、日本聖書協会から2018年1月に発行されています（全国のキリスト教書店で無料配布中。PDF版は日本聖書協会ウェブサイト「新翻訳事業について」<http://www.bible.or.jp/know/know31.html>からもダウンロード可能です）。

（付記：本稿は2016年10月8日に行われた藤女子大学キリスト教文化研究所主催の公開講演を文章化したものです。）